



題字…今山政三郎氏

発行所  
新潟県小学校長会広報部  
新潟市中央区幸西3-3-1  
じょいあす新潟会館2階  
TEL 025-290-2231  
FAX 025-245-6060  
E-mail: nsgko@niigata-inet.or.jp  
印刷所 株式会社 文久堂  
カット…石塚 崇  
(新潟 坂井東小)



新潟県小学校長会 福利部長 関 谷 祐 二

# 試練の中、未来に向かつて

中国の古典「管子」に「終身の計は人を樹うるに如くはなし」とあります。日々、人を育てるといふ崇高な使命感と誇りをもち、心身共に健康で、教育現場で仕事に精励する教職員の姿が未来を創ります。しかし、教員志願者数の減少は、教職の魅力を高め発信することが待ったなしの状況であることを示しています。未来社会の創り手、担い手の育成に献身的に関わりながら、自ら潤いのある生活の維持向上を図ること。そして、志と能力ある人材が教職を目指す社会を実現する担い手となること。こうした重要なミッションが今、全ての教職員に突き付けられていると捉えています。

この超難題の解決には、教員の待遇改善と学校を支える社会の再構築が不可欠ですが、年金制度をはじめ社会保障の財源が乏しい中、教員の給与制度をめぐる厳しい現実が、難題さに拍車を掛けています。この厳しい試練に心折れることなく、私たちは歩み続けなければなりません。校長会も、福利厚生制度を活用した相互扶助、共助の重要性を共通認識し、課題を共有し、福利厚生制度の仕組みや内容の理解度、関心度の個人差や年齢差を埋める営みを地道に積み重ねてきました。

統計的に男性の四人に一人、女性の二人に一人が九十歳まで生きる時代を迎えたと言われます。自身を含め、未来を創る教職員が、心身共に健康であること。仕事を通じてどんな豊かな人生をどのように歩むか、生き方と働き方の具体的な構想を描く余裕を生み出すこと。そして、職務にいきいきと取り組むこと。これらは全ての校長の願いのはずですが、校長自らが先導役となり、教職の魅力を教職員の姿で世間に粘り強く発信していきたいものです。

第七十一回全国連合小学校長会研究協議会秋田大会が、十月十七日・十八日の両日、秋田市を会場に開催された。全国から二千三百名の会員が集まり、新潟県からも四十六名が参加した。大会主題「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」は第六十五回三重大会から受け継がれ、実践と提言が行われてきた。この秋田大会をこれまでの研究を総括し、新たな研究主題で開催される京都大会への展望を明らかにする大会として位置付け、副主題は「ふるさとを愛し、志をもって自ら新しい社会を切り拓く子どもを育てる 学校経営の推進」と設定し開催された。一日目の午前は、開会式の後、文部科学省大臣官房審議官の矢野和彦氏より、新しい時代の初等中等教育の在り方、教育の情報化推進、学校における働き方改革の推進等について詳しい説明があった。

午後には、五領域十三分科会に分かれて研究協議が行われた。各分科会の主旨や研究の視点及び発表内容はホームページで公開されており、事前に読み込んだの参加となった。校長の果たすべき役割と指導性を明らかにすべく、

(長岡・三島 表町小学校)  
(五泉・東蒲 村松小学校)

## 大会の概要

# 全連小・秋田大会報告

甲斐浩之

グループでの協議を深めた。二日目の全体会では、研究協議のまとめが確認された。研究領域は違うものの、共通するキーワード、重要性としては次の二点であると思われた。

- 一 明確な経営ビジョン
- 二 学校と家庭・地域の連携・協働

その後、八項目の決意が大会宣言として確認された。

シンポジウムは、佐々木常夫氏(元株式会社東レ経営研究所社長)、橋本五郎氏(読売新聞特別編集委員)、丑田香澄氏(内閣官房ふるさと活性化支援チーム委員)の三氏による「ふるさと・志・未来創造」をテーマに行われた。「子どもたちには、自立する力を身に付けさせること」「校長は何かが必要か、不必要かの基準を示し、先生方を授業に集中させるマネジメント力を高めること」との提言をいただいた。

閉会式では、次期研究協議会が、京都府で開催されることを確認し、本大会を終了した。

## 大会の概要

## 関ブロ・千葉大会報告

佐藤和彦

第七十一回関東甲信越地区小学校長研究協議会千葉大会が、千葉市を会場に六月十三日・十四日の二日間の日程で開催された。参加総数は一都九県から千三百名を超え、本県からは四十六名が参加した。

本年度は、平成二十五年度より引き継いできた全連小大会主題「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」のもとで行う最後の大会であった。

その主題が示す理念の具体化と研究の集大成を目指して、副主題「豊かな発想力や創造性を身に付け 多様な人々と協働しながら 未来を拓く子どもを育む学校経営」が設定され、校長の役割と責務、指導性について協議した。

大会一日目は、開会行事と記念講演が行われた。鬼澤真寿関東甲信越地区小学校長会連絡協議会長は、「予測困難かつ急激な変化の社会を生き抜く力の育成に向けて、校長自らがリーダーシップを発揮して課題解決に邁進しなければならぬ」と挨拶された。また、中澤泰蔵実行委員長は、「新学習指導要領の全面実施や働き方改革等、教育の新たな時代を校長は真摯に受け止め、

改革・改善に努めなければならない。」と挨拶された。

続く記念講演では、千葉工業大学未来ロボット技術研究センター所長の古田貴之氏が「ロボット技術と未来社会」と題し、自ら開発されたロボットの紹介を軸としながら、未来社会についてプレゼンしてくださった。

二日目は、五領域十二分科会、二十四分科会に分かれて提言・協議が行われた。本県からは二名が発表した。新発田市立七葉小学校長が「組織・運営分科会」において「学校経営ビジョンの実現を目指した円滑な組織運営」について、燕市立吉田北小学校長が「国際理解教育分科会」において「グローバル社会の中で様々な人となりが、共に生きる児童の育成」について、それぞれ提言した。

各分科会では、都県は違えど校長が抱える悩みや課題は共通していることが確認され、校長としての決意を新たにすることができた。

最後に、第七十二回関ブロ大会が茨城県水戸市で開催されることを確認し、本大会が終了した。

(加茂・南蒲 加茂南小学校)

## 大会の概要

## 関ブロ・千葉大会提案発表

小野沢 謙一

## 一 提案主題及び副題

「学校経営ビジョンの実現を目指した  
円滑な組織運営」  
心の教育の充実を推進する学校経営

## 二 研究の概要

## (一) 学校経営ビジョンの焦点化

課題解決のために連携・協働を図るキーワードを「笑顔あふれる七葉」とし、意図的にこの合言葉を使用し、様々な教育活動を進めている。

## (二) 校務分掌の見直し

全職員の参画意識を高め、主体的に校内研究を進められるよう研究組織を見直した。「人権教育、同和教育部」と「学力向上部」の二つを繋ぐ「研究推進部」を設置し、研究を推進している。

## (三) 地域との連携による取組

「七葉の明日を語る会」を年一回(十二月)実施。参加者は、教職員、地域代表(自治会長等)、中学校長、保育園長、児童代表、中学生代表(卒業生)など約五十人。趣旨は、「笑顔あふれる七葉」の実現を目指し話し合う。

## (四) 中学校区(二小一中)による取組

中学校区の推進校としての自覚をもつ全教職員は、三校共通「人権学習」年間指導計画、「人権教育、同和教育学習」指導計画一覧表を作成し、取組を推進している。

## 三 成果と課題を受けた提言

(一) 校長は、地域と学校の課題を的確に把握しながら、学校経営ビジョンを焦点化し、教職員、保護者、地域に浸透させ、共有化を図りながら学校経営を進めていく。

(二) 校長は、教職員の協働・参画意識を高めるために、課題解決の見通しを明確に示し、具体策を全教職員が共有化できるようにする。その中で教職員の職能向上を図り、仕事への意欲を高めながら、自己有用感、自己肯定感を得られるようにする。

「働き方改革と学校経営ビジョンの浸透は切り離せない」との助言を常に心に留めている。

(新発田・北蒲 七葉小学校)



# 耳取遺跡

## 丘の上の住みよいムラ

川崎 英郎

### ◇耳取遺跡とは

耳取遺跡は、見附市南部、長岡から続く東山丘陵が刈谷田川で途切れるあたりの、標高七十mほどの丘陵の平坦地にある縄文時代の遺跡です。

明治初期に開墾され土器や石器が出ることから、明治三十年代以降調査が行われ、専門家の間では遺跡として知られるようになりました。

その後、昭和四十二年の発掘調査、六十二年には民間の開発計画に伴う発掘調査が行われ、全体としては七万二千㎡の広さを有する貴重な遺跡であることが確認され、開発は中止となりました。

そして、平成二十三年から本格的な発掘調査が行われ、平成二十七年に国指定の遺跡となりました。

### ◎特徴1 使われていた期間が長い

耳取遺跡全体では、縄文時代の区分の中では一番古い草創期から、弥生時代以前期にまで及ぶことが分かっています。(縄文時代早期のみ未発見)長い長い縄文時代を通して使われ続けた遺跡です。

さらに、近隣には旧石器時代から中世までの遺跡も存在しています。

### ◎特徴2 主な遺構が重なっていない

長い期間使われた遺跡ですが、特に①縄文中期、②縄文後期、③縄文晩期の三つの時期の集落跡が中心です。この三つの時期の集落跡が、中央部・西側・東側と少しずつ区域を異にしているため前の時期の遺構が壊されずに残っています。

### ◎特徴3 後期集落として県内最大規模

三つの時期の集落跡は、五万㎡にも及ぶ丘陵中心部の平坦地にあります。その中でも後期集落は県内の縄文後期集落跡としては最大規模のものです。

### ◎特徴4 貴重な丘陵上の晩期集落

縄文時代の集落は、時期が下るにつれ、次第に高台から低いところに降りてくるのが一般的です。晩期の丘陵上の遺跡は珍しいもので、県内でも貴重な例です。

### ◇三十稲場式土器

新潟県の縄文土器と言えば、火焰型土器が有名です。その分布域に含まれている耳取遺跡からも発見されていますが、数はあまり多くありません。

耳取遺跡で最も特徴的なのは、縄文後期の三十稲場式土器です。

火焰型土器で有名な長岡の馬高遺跡のお隣、三十稲場遺跡の名を冠したこの土器の特徴は鉢形の口付近に輪の形があること、刺突紋(突つついた模様)や櫛形紋(櫛で引っ掻いた模様)があること、そして、蓋がある場合が多いことです。

### ◇ヒスイ製大珠

近年発見され、最も注目されているのが、中期遺構から発掘されたヒスイ製大珠です。糸魚川のヒスイは、五千年も前から大事にされ広く流通していました。耳取遺跡で見つかったものは、県内最大、10・6cmもあります。詳しいことは今後の研究を待ちますが、この地域の中核的遺跡だったことがうかがえます。



縄文後期のムラ

### ◇掘立柱建物

中期遺跡で見られる住居跡は、いわゆる竪穴住居です。しかし、後期になると、掘り込みの確認できない楕円形の建物の他、四隅に柱を立てた掘立柱建物が多く見られます。また、広場の南東には他の建物の柱より格段に太い、直径二mもの柱跡が、一間×一間の正方形に並んでいます。上部構造は不明ですが、あの三内丸山遺跡のやぐらを彷彿とさせるも



縄文晩期の建物

さらに、晩期になると、掘立柱建物のみで構成され、四隅の柱の他に梁を支える柱を別に立てた、亀甲形、五角形などの建物も多く見られます。縄文住居Ⅱ竪穴住居というイメージを変えてくれるものです。大変な暴れ川の反面、豊かな恵みを与えてくれる刈谷田川。そのほとりの丘の上に、とても住みやすいムラがありました。縄文の人たちは、長い間そのムラで暮らし続けていました。

(資料提供・みつけ伝承館) (見附 上北谷小学校)

市市  
都都  
指定  
郡郡  
政政  
だだ

# 各校長の学校運営を支える 校長会を目指して

## 阿賀野市小学校長会

秋になると白鳥が飛来することでお

名な阿賀野市は、東の五頭連峰、西の阿賀野川に囲まれ、豊かな自然と伝統ある文化と歴史に恵まれた地域である。

校長会は八名の会員で構成されており、阿賀野市学校教育の基本理念である「自立・信頼・共生」の具現化を目指して、年間十三回の定例会や研修会を中心に活動に取り組んでいる。

### 一 幼稚園・中学校長会との連携

市内の幼稚園と中学校、合わせて十四園校で毎月定例会を開催している。前半は教育委員会より指導をいただき、後半では協議や情報交換を行っている。特に、中学校からの情報は、小学校でも課題解決に直結する内容が多く、学校運営上の視点を増やす上での貴重な時間となっている。また、中学校長会と連携して市への要望書を作成し、教育現場の声を広く伝えている。

園小中合同研修としては、毎年六月に管理研修を実施している。今年度は、昨年度に引き続き下越教育事務所学校支援第一課長を講師に招き、演習も含めてご講話いただいた。改めて日々の学校運営や教育管理の大切さを共通認識することができた。十二月にも地域

連携をテーマに研修予定である。

### 二 小学校長会研修の実施

研修としては、校長会関係プロ・全国大会の報告に加え、会員が講師を務め「いじめ」「資質能力の育成」等をテーマにして学び合っている。

また、来年度は、五泉市・阿賀町と共催で下越地区研究会を主管することになっており、準備を進めている。

当市はここ数年での統廃合が進み、以前の三分の二の学校数となった。八校と学校数が減ったことを強みに変え、各学校間での横のつながりを強く速くもつことを心掛けている。校長会では、各校の課題と解決策を共有する場を設けている。情報共有することで、校長会は、校長が安心して学校をリードするための支えや拠り所ともなっている。これからも、校長会としての横の連携を大切にしながら、阿賀野市小学校教育の発展・充実に尽力していきたい。

(神山小学校 磯部 裕之)

## 学校紹介

# 地域に開かれた「共育」の推進 地域行事と学校行事の協働を大切にしたい取組

## 長岡市立小国小学校

小国小学校は、小国町三つの小学校が統合して、平成二十九年四月一日に開校した。教育目標を「愛 夢 志 志 志」ふるさと小国を愛し夢に向かって志高くがんばり抜く子」と目指す学校像を「笑顔いっぱい 学びいっぱい 元気いっぱい」としてスタートした。統合して児童数が増え、活力あふれる学校への地域住民の期待は大きく、「共育（共に子どもを育てる）」を合言葉に、地域・保護者と協働しながら教育活動を進めている。その一例を紹介する。

### 【越後カントリートレイルを授業日に！】

毎年全国各地や海外から一〇〇〇人を超えるランナーが集まって開催される大会である。交流を通じた移住定住のきっかけづくりと地域経済への波及効果を推進するために、地域を挙げておもてなしをしている一大イベントだ。地域の熱い思いを受け止め、昨年度より全校児童・保護者・教職員で参加することにした。美しい小国の自然を満喫しながらランナーと一緒に走りゴールを目指す。その他にも、応援グッズや完走賞を作り、おもてなしをする活動やランナーへのインタビュー活動・英語による外国人との交流等の活動を

取り入れている。子どもたちは、地域外の人が感じる小国の魅力を知り、当たり前だと感じたり前だと感じていた自然の美しさや人の温かさが、実は小国の魅力であり、宝であるということを学んでいる。地域からは、小国の活性化の一助であり、ふるさと愛の醸成になる取組で、ありがたいと称賛の声が届いている。



さらに、今年度は地域行事の秋まつりと学習発表会を同日開催とした。地域の方は児童の発表や作品を自由に鑑賞し、児童や教職員は、地域の方の作品や伝統芸能を鑑賞する機会となる。このように、学校と地域が一体となった地域に開かれた教育活動を大切にしている。

(龍池 明美)



県小学校長会  
HPへアクセス



学校経営に役立つ  
情報満載